



「妻、娘、ニューヨーク」

妻と娘をつれてJFK空港に降り立った。この数年間、海外勤務の可能性に賭けて、少しずつではあったが家族みんな、英語を話せるようになると、英会話を練習してきた。その甲斐があって、空港内で通りすぎるアメリカ人たちのなにげない一言が聞き取れる――ニューヨークの空港に降り立って最初に、そのことが嬉しかった。

平日の午後三時をまわったばかりの昼下がりにニューヨークの空港にいと、この国では＜私と妻と娘＞三人が“家族”なんだ、ということをおのずと意識してしまう。映画でしかみたことがない大きな黒人や、まさにウォール街のビジネスマンらしきスーツ姿の男性、みんなが飛行機から降りると足早に歩きだしている。妻と娘はこの巨大都市で私にしか頼ることができない。そう思うと、自分がしっかりしなければ、と思うとともに、急に私にとっての、もうひとつの“家族”である実家の母親に電話をかけたくなった。

時差が十四時間ということなので、今頃北海道の、実家の大きな古時計の針は、午前五時をさしているだろう。

私は実家の母親に電話をかけて、ニューヨークから娘の声をとどけようかと考えていたが、老いた母は最近、朝起きられないと言っていたことを思い出してやめた。それにこの周辺で携帯機器をつかっていいのかもわからなかった。

私たち家族は、足早に歩くほかの乗降客とはちがって、ゆっくりと通路を歩いていたのだが、私は、シカゴ行きの飛行機が飛び立つのを通路の窓から眺めながら、北海道の実家に暮す両親の顔を思いうかべていた。痛風が悪化したという母親と、健康ではあるが仕事をやめて以来、毎日寝ているという父親。

「町で最後の本屋をついでくれないか。この通りだ。たのむ」

父親が、初めて自分に頭を下げてきたあの日。

あれから七年もたつ。

実家の本屋を私が継いでいけば、父は今でも母や私に笑顔をみせていただけるか。

私は大学を卒業して以来、当時、東北の物流を一体管理していた輸送業の会社にはいった。結婚して三年目でもあった私にとって、父親が「本屋をついでくれ」と電話をかけてきた時期は、

一番節目で、そのときに仕事をやめることは、手をのばせばそこにある、目の前にぶらさがった出世コースを手放すに等しかった。

「町に本屋がなくてもいいじゃないか」

私は、あの日、父の頼みをつめたく断って、電話を切った。父はそれからまもなく本屋をたたんで、今は両親二人、年金でささやかに暮らしている。だがその日以来、父は私だけではなく、母とも口をきかなくなった。私も、結局、生れ故郷の町に本屋が一軒もなくなったことが、まるで自分の責任のように感じるようになって、それ以来、電話で母と話すことはあっても、故郷に帰っていない。

勤めている会社は2010年までに数度の合併をして、東北・北海道だけでなく全国の物流を一手に担う大会社に発展してきた。そして私もガムシャラに働いてきたことが認められて40代前にして営業本部長になった。

「川村君、わが社は今後、輸入部門をたちあげることにした。それについて、君にはニューヨークでひとまず三年、アメリカ営業本部の礎を築いてもらいたい」

ある日、話は急にきまって、私たち家族はアメリカへ、それもいきなりニューヨーク暮らしをはじめることになったのだ。それで私たちは今日、ここにいる。

入国管理窓口へ向う通路を歩きながら、ふと娘をみると、小学校の低学年らしくない表情をしていた。どこか硬いのだ。

「どうした？ アメリカ人は……大きいなあ」

私がいうと、娘は「あたし英語でちゃんと質問に答えられるかな」と下をむきながらつぶやいた。そうだ。これから入国管理官による簡単な質問がおこなわれるのだった。娘はそれで、ずっと飛行機の中から緊張していたのかもしれない。いつも、無邪気にはしゃぐ娘の姿しか知らなかったから、私は動揺していた。それと同時に、ちょっと困った表情をした娘に、私は懐かしさをおぼえた。

妻だ。娘は妻に似てきたのだ。十年前の妻は、いつも、ちょっと困ったような顔ばかりしていたのだ。

「わたしたち、これからアメリカに住むのね。もう、あなたに毎週毎晩、出張させないわよ」

顔をこわばらせている娘とは対照的に、アメリカに来たことでわくわくしている妻が私に話しかけていた。私はいつのまにか、ふくよかでにっこりと微笑んだ表情があたりまえになっている妻の10年前の表情を思い出していた。

妻は私と同じ会社で経理をしていた。彼女をはじめてみたときから、私はなぜか彼女を守ってあげたいと思ったものだ。精神的にナイーブだったのか、それとも当時はいまより労働環境が整っていないこともあって、優秀だった彼女には、ものすごい量の仕事がわりふられていた。たびたびの出張での経費精算などで彼女と会うたびに、どんどん痩せていく彼女を、守ってあげたい――私から告白したあの頃がとても懐かしい。

妻は娘を産んでから、いろいろな意味でタフになった。私が守ってあげたいと思っていた彼女はいつのまにか私を助けてくれる側になっていた。これまで何度、窮地を妻に救ってもらわれたかわからない。

七年前、北海道の故郷で最後の一軒になった地元の本屋を私が「つがない」決意をしたとき、妻も私と同じ意見だった。なぜなら、私も妻も、いまよりずっと若かったからだ。両親と同居して暮らすより夫婦でのんびりと過ごしたかった。それに今の営業の仕事は私にとって天職だったし、実際に私は30代にして営業本部長になれたのだから、その直観は間違っただけではなかったのだらう。

けれど、私が仕事にのめりこんで出世していくのとは裏腹に、妻は毎日のように「あなたは地元の本屋を守るべきだったよねえ」と、表情は笑顔のままだったが、なにかとくり返すようになった。この三年のあいだは、私は毎週、どこかの支店へ出張していたのだ。

「もし海外支部ができれば、そんなに出張もないだろうし、みんなでいられるんだけどな」

私がたまたま、酒の勢いで思いつきに述べたことを、妻は本気に思って、それではじめてのが家族そろっての英会話だった。もし英会話という共通の目標を家族でもっていなかったら、私は妻と娘とコミュニケーションをまったくとらなくなっていたかもしれない。

入国審査官の前に、到着した。まず妻が、つぎに娘が、最後に私……の順番で入国するように二人で決めていた。先頭の妻が進んだ。入国審査そのものは、ほとんどが儀礼的なものにすぎない。けれども、妻と娘と私にとっては、アメリカで暮しはじめる、ということが、家族にとっても大きな意味を持つようになってくる気がするのだ。この門が、生活が変わることの象徴のように思えた。

私は妻の背中、娘の背中をみつめていたが、デートしていた当時は焼肉屋に入るのにもビクビ

クしていた妻の背中もしっかりと伸びていて、そして当時よりずっときれいだった。娘は、あんなに小さくて動物みたいだったのに、今では英語も話せる女へと成長していた。彼女たちは、すんなりと許可をもらってアメリカ合衆国へ入国していった。

私の番である。

(了)